昭和59年7月25日

郷土あれこれ

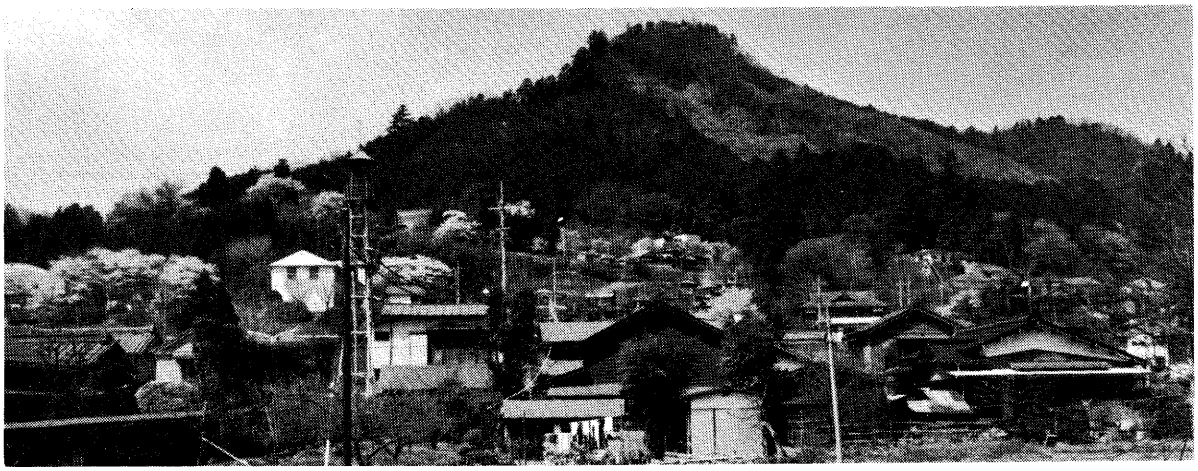
郷土館だより
第7号

五日市町立
発行　五日市町郷土館　東京都西多摩郡五日市町五日市920-1　電話0425-96-4069　有線4607

五日市の城

戸倉城の場合

中世城郭研究家　中田正光



戸倉城山を望む

(1) はじめに

城というと、まず白壁、濠、白鳥、天守閣といったイメージを思い浮べますが、これは姫路城や大阪城に代表される近世のお城です。一口に城といっても、古代城郭、中世城郭、近世城郭といろいろあり、各時代の防衛施設が全て城です。第二次大戦中の防空濠も、いわば現代の城といえましょう。

近世の城が、政治的経済的基盤のもとに見栄えよく作られるのに対し、中世の城は自然の地形を利用して費用をできるだけかけずに作られています。中世の城は「見せる」ためでなく「戦う」ために作られたものだからです。数からみても、近世の城より古代、中世の城の方がはるかに多い。特に中世の城は遺構がよく残っています。土だけの遺構ですが、当時の様子が充分に想像できます。

五日市周辺には、戸倉の城山、網代城、檜原城、北伊奈の伊奈城、それに狼煙(のろし)をあげる物見山などを入れて7か所ぐらい中世の城郭遺構があります。この中で戸倉城がよく遺構をとどめておりますので、これについてお話をしましょう。

(2) 戸倉城と小宮氏・南一揆

戸倉地区の最初の支配者は誰かということがよく問題になります。たとえば南一揆衆だとか、『新編武蔵風土記稿』にでてくる小宮氏だとか。これはなかなかむずかしい問題で、断定できませんが、今までの資料をまとめますと、まず小宮氏については、横沢の大悲願寺の過去帳や棟札、山田の瑞雲寺観音堂の棟札などに、その名が見られます。また滝山城にも八王子城にも、小宮曲輪(くるわ)と呼ぶ部分があります。こうしてみると、小宮氏は五日市周辺のどこかに居た有力者であったことは確かなようですが、五日市地方を治めたお殿様というわけではないようです。

次に南一揆というのは、室町時代の初頭以降この秋川

谷に拠点をもっていた有力地侍層の地域連合体です。いろいろな戦いに出陣していますが、その時どきの勢力の動向を眺め、なるべく有利な方へお味方して恩賞などを得ています。自分たちの殿様（統領）をもってはいませんが、代表者といえば平山氏や、さきの小宮氏でしょう。その下に木住野、私市、網野、戸倉といった地侍がいたのだと思います。

地侍とお百姓の違いですが、米を作って、そこから年貢を支払うのがお百姓です。地侍は半農半士で、日常はお百姓でもあるが、軍役を勤める点がお百姓と違います。武士になるか、百姓でいるかは自由ですが、百姓なら年貢、武士なら軍役を免れません。

・さて戸倉城と小宮氏と南一揆とは互に深い関連があると推定されましたが、これは戸倉城の遺構の上からも判断できます。戸倉城は南一揆時代（15C頃）に使われた古い部分と、その後の後北条時代（16C）に改修された新しい部分が、はっきりと認められます。

(3) 後北条氏の関東支配

戦国時代（16C）当地方の支配者となった北条氏は民政も軍備も一段と厳しい体制をとりました。

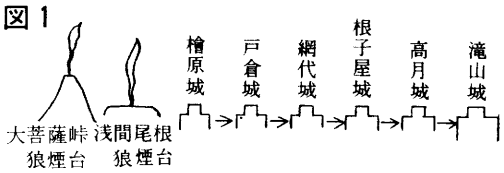
北条氏の本城は相模の小田原城です。その本城には直属の家臣団、たとえば小田原衆、御馬廻衆とかがいて小田原をとりまく関東各地に支城を置きます。例えば滝山城の北条氏照の軍団、鉢形城の北条氏邦の軍団、玉縄城の北条綱成、江戸城の遠山直景、岩槻城の太田氏房等々がいて、これらが一体となって、北条領国を形成していたのです。これら北条氏系の城は三千から四千あり、西多摩地区だけでも47もあります。その他に他国衆（攻め取った城）が加わります。それぞれの支城を守る家臣団の下に下層家臣の集団がいたのですが、これは土地の有力土豪、つまり名主（みょうしゅ）層の人々です。

(4) 滝山城をめぐって

こういう北条氏の軍事体制のうち、五日市に最も関係の深い氏照の滝山城では、周辺の小さな支城をどのように支配したのでしょうか。滝山城の下に檜原城(檜原村)勝沼城（青梅市）、沢山城（町田市）、滝の城（しろ）（埼玉県所沢市）、津久井城（神奈川県城山町）といった支城があります。この五つの城は氏照の支配する領土の境目に位置し、この内側が氏照の本来の領国です。調査してみますと、明らかに北条氏が作りかえたと思われる跡があり、私達は「境目の城」といって重視しています。

境目の城の一つである檜原城には、戸倉の人達も檜原衆（檜原城を守る人たちの意）と呼ばれ集められました。隣国甲斐から大菩薩峠の南側を通って檜原口へ出ます。武田氏の盛んな頃は青梅街道を重要視し、大菩薩峠の北側を通り、旧青梅街道を通って勝沼郷へ出るコースもありました。ともかく大菩薩峠から狼煙が上ると、浅間尾根の狼煙台を経て檜原へ着きます。それから戸倉城へ来、今度は網代城へ行く。網代城から秋川市の根子屋（ねごや）という城へ情報を送ります。根子屋から高月城にゆき、高月からは馬か何かを飛ばして滝山へ届けたのでしょう。

図1



狼煙についてですが、実際に狼煙をあげたかどうかは疑問です。狼煙をあげるのはそんなに簡単なことではないので、実際はホラ貝とか鐘とかを使ったのかも知れません。城と城との距離を測ると4キロから5キロ、多くて7キロなので、鐘か何かで届くと思います。昔は雑音がないし、鐘なら雨ふりでも平気です。もっとも大薩菩峠からこちらへ来る狼煙台はありました。

(5) 北条氏の軍制

檜原城は境目の城として重要視されたとはいうものの、常に人間がいたわけではありません。戸倉城、網代城も同じことですが、数人の見張りを残し、他の兵隊はみな平地に住んでいたのです。それを根子屋といいますが、その根子屋の中に常に軍団を編成していました。「清戸（せいと）三番衆」という文書によってその様子がわかります。この中に「所沢の滝の城を15日間警固しなさい。15日警固したら、次の衆に代りなさい。」とあって、清戸三番衆（青梅の土豪達）41人の名が載っています。一番衆、二番衆、三番衆と順番に警固に当ったのでしょう。この41人と、それに従者を1人、2人つけても百人程度が檜原城や滝の城、沢山城などに常に行ける態勢をとっていたわけです。これを「支城在番の制度」といいます。

また戸倉の木住野大炊介らに宛てた陣触に「長さ二間に足らない槍は持ってくるな」とあります。北条氏は長さ3メートル位の槍を頭上でグルグル振り廻して隣りにぶつからない程度の人数を常に備えたといいます。戸倉城の場合、恐らく30人か40人でしょう。あまり多いと隣りにぶっつかったりして、かえって邪魔なわけです。

守るのに30人か40人。それに対し、攻めるには、当時では10倍の兵力が必要だったといわれます。3百人から4百人が必要なわけです。八王子城の場合は守るのに3千人程度必要ですから、攻めるのには3万人から4万人は動員しなければなりません。

(6) 貫高と軍役

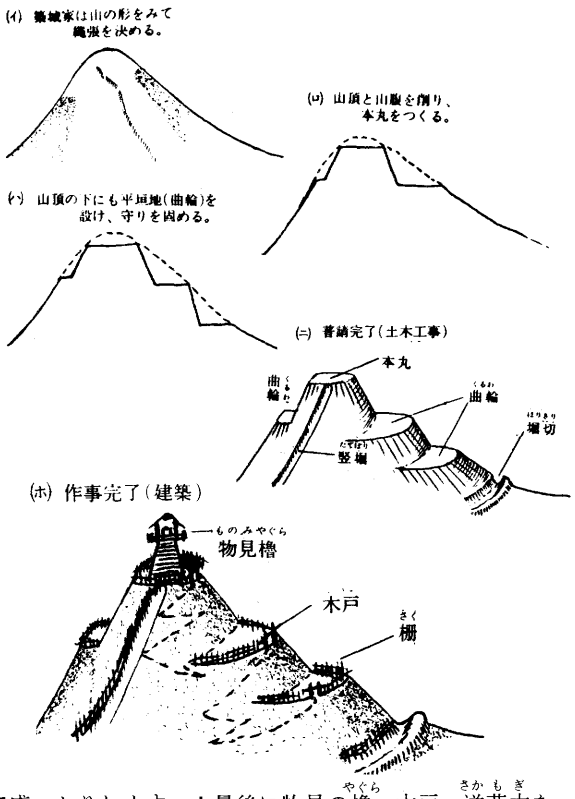
ところで、永禄2年（1559）に作成の「小田原衆所領役帳」には後北条氏の家臣団が列挙され、貫高（かんだか）が記してあります。貫高というのは、武士が所有している土地に対する課税額を銭貨で計算したものです。大体1貫文の土地とは田にして2反くらい。7貫文で1人出陣の義務があるという規則だったようですから、もし50貫文の所領をもつ武士だったら、自分の他に6人の従者を連れなければならないわけです。北条氏の家臣は50貫前後の人が多かったようです。戸倉の木住野大炊介は永禄9年の「着到状」によれば貫高11貫544文で、自分の他に1人の従者を連れていくことになっています。14貫で2人のはずですが、この木住野氏の場合はきびしいですね。大炊介は半農半士で、普段は農家で鍬をふるっていますが、北条氏の命令（着到状）を受ければ戦闘に出なければならないわけです。

北条氏の末期、天正15年（1587）豊臣氏の東征を予測して大動員令が発せられます。15才～70才の男子が狩り出され、「腰指（こしざし）の類がヒラヒラ武者めくよう」等と、侍の格好をするように指示されています。しかも人質を要請し、もし人質が出せなければ切腹というきびしい陣触れなのです。いかに北条氏が切羽つまっていたか分りますが、狩り出された農民達の苦労も大変なものだったと思われます。

(7) 城の築き方とその移り変り

イ城を築くにあたり築城者は、この山をどんな城にしようかと構想を練るわけです。その構想の下に、まず、**ロ**山の頂上を削り取って平にします。ここが本丸で建物を建てます。次に下から登るのを防ぐために壁面（山の斜面）を削り落して急勾配にします。さらに**ハ**必要に応じ何か所か削り落しますが、その都度段々畑のような平地ができます。この平地を曲輪と呼びます。**ニ**尾根が続くと尾根伝いに登られます。これを防ぐために、尾根を切って堀をつくります。これを堀切といいます。また斜面をよじ登ってくるのを防ぐために山頂から山麓に向って竪堀（たてぼり）を落します。削った残土は曲輪のまわりに土塁として盛ったりします。**ホ**最後に物見の櫓（やぐら）、木戸、逆茂木（さかもぎ）などを作って完了します。以上が築城のあらましですが、次に城の変遷を時代を追ってお話しましょう。

図2



中世の城のはじまりは武士の居館（館（やかた））で、それが発展したものと考えられます。

鎌倉時代、武士の居館は一辺が約百メートルの方形につくられました。これも自然の地形を利用して、川などあれば一番いいわけですが、まわりを掘って土を盛る。隅に櫓台を設け、次に建物を建てるというように作られこれを「方形館」といいます。そして時代が進むと共に複雑化するものもあり、方形を三つ四つと組み合せた「館城（やかたじろ）」になります。

南北朝時代になると、戦闘の主力は騎馬戦から、山にとじ籠っての籠城戦を展開するようになり、そのため、山城がどんどん作られます。当時の城作りは一つだけ単独に作るのでなく、周りの山も含めて城郭化するという傾向があり、百メートルごとに幾つも城があるという地域さえ見受けます。

戦国時代に入ると、戦闘が長引くのを予想し、居館と山城が一体化したものを作るようになります。山の上が山城、下は居館で、いざというときだけ山城に登るわけ

です。多摩では八王子城、檜原城、勝沼城が典型的です。また趣の変った山城としては、神主さんの城である御岳山のような例もあります。寺自体が城であるもの、農民だけの城もあり、中世の城は種類も数も実に多いのです。

(8) 戸倉城

さき述べたように中世の城は自然の要害を利用し、できるだけ安い費用で作れる場所を選びますが、五日市を見廻すと、こういう城に適した山はやはり戸倉の城山のようです。今熊山は山頂が広すぎて守るのに多人数を必要とし、金比羅山はいい地形ですが、尾根が四方八方に伸びていて守るのがやや困難です。これに対し戸倉城は尾根上も一直線で、しかも急勾配ですから、少し削れば完璧な守りになるという城です。

城には普通大手口（表口）と、搦手（からめて）口（裏口）がありますが、戸倉城の場合は、現在の城山荘の所から登る登り口1か所だけです。今では光厳寺の裏から登るコースがあり、ここを登ると本丸（山頂）に直接達します。しかし本丸の周りは土塁を盛った形跡があり、昔は下から登れないようにしてあったのです。光厳寺裏から登れないとすると、光厳寺辺が居館であったという従来の説は疑問になります。居館は恐らく大手口の城山荘周辺と考えた方が適切のようです。

さて戸倉城の構造ですが、この城は東西二つの部分から成っています。城山荘の所から尾根上（大手道）を登っていくと、東側の山頂が本丸で、西側は別郭（べっかく）です。西側は作りが古く、恐らく南一揆時代の城と思われます。これに対し東側の城は新しい技法なども見られ、後で作られたもののようです。戸倉城はこの二つの城が合わさって始めて城としての価値が出るという作りです。これを「一城別郭」といいます。大手道を寄せ手が来たら東西から挟み撃ちで死守するというわけです。

戸倉城には明確に判断できる五つの木戸跡と、二つの推定ヶ所があります。（付図卄の所）また「桝形虎口（こぐち）」と呼ばれる新技法が採用されています。これは本丸下の平地に作られていますが、兵隊が攻めてくる道を一の木戸を入ってから直角に曲げ、曲げた所にもう一か所二の木戸を設けるというものです。寄せ手が一の木戸を入るとき横から槍でつく、さらに二の木戸を入って曲ったとき、上、横、背後の三方から攻撃できる作りです。この「桝形虎口」は北条氏の得意とする技法で、これによって戸倉城の一部分に北条氏の手が加わったことが確認できます。戸倉城の今一つの特色は山城には珍らしく、水の手（井戸）が現存することです。城はどんなに高くても井戸を作らなければなりませんが、今に残る例は珍らしいです。

竪堀と堀切は西側の別郭の方に見られます。寄せ手は真っ直ぐに上へ上へと攻めるだけでなく、横にも移動し、山の周りを廻り込もうとします。これを防ぐのが竪堀です。堀切も竪堀も今は埋って浅くなっていますから、跳びこえられそうですが、昔は巾も深さも充分にあり、そのうえ柵があったり、堀の中には竹を切って刺してあったんじゃないかと思います。

中世の城についてのイメージを深められたうえで、城山にお登り下さい。良い風景を眺めながら、ここに木戸があったのかな、などと考えながら登るのも心楽しいものです。埋れゆく城の再発見をおすすめします。

3月17、18日講演要旨　文責郷土館

戸倉城址

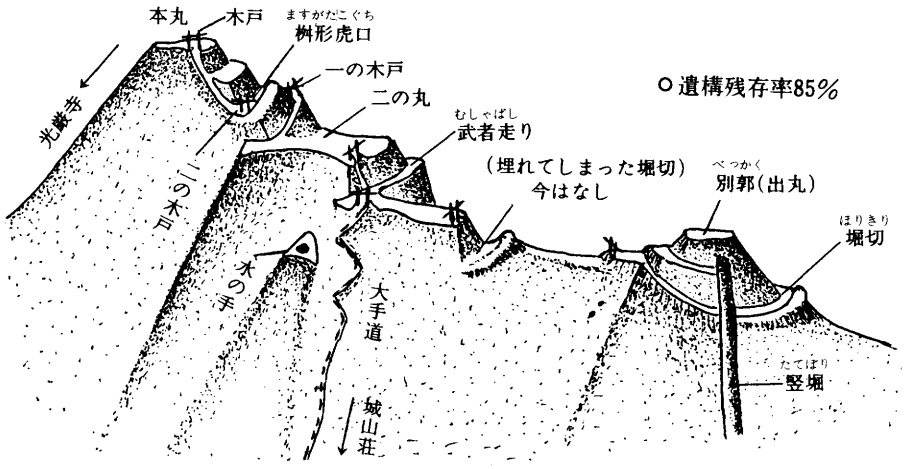



図3